

# 「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝



## 「保護者の期待と不安」

ある学校で保護者に知能検査の結果を基に、発達のアンバランスさがあるため、通級指導教室等による個別指導の活用を提案しましたが、難色を示しました。その理由として、「何もできないから個別指導を受けていると思われる」、「個別指導を受けると兄弟に悪影響が及ぶ」、「周りの友達に嫌なことを言われる」などを挙げていました。子どもの多様なニーズが広く認識されて、特別支援教育の必要性が理解されてきましたが、一部の保護者の中には、根強い偏見や誤解があることを知りました。そこで、月刊誌「特別支援教育研究」12月号に掲載されていた「個別の配慮を必要とする保護者の期待と不安」を紹介します。

### 1 保護者の期待のキーワード

「笑顔」「受容」「理解」「コミュニケーション」「充実」「楽しく」「変容」「偏見をなくしながら周りの理解を深める」など、保護者は一人一人を個の存在として受け入れ、理解し、多様性を尊重する姿勢を強く望んでいる。

### 2 保護者の不安のキーワード

「恐怖」「無関心」「疎外」「嫌悪」「偏見」「周りの目」「孤立」「孤独」など、保護者はコロナ禍の影響で学校とのコミュニケーション不足が顕著になり、意見交換が不十分であること、保護者同士の連携が弱まっていることを心配している。

### 3 保護者が園や学校に期待すること（保護者の率直な声）

- ・子ども一人一人を障害の有無に関わらず人として見てほしい。自分の子が言われて嫌なことは言わないでほしい。
- ・手のかかる子どもほど面倒くさがらずに関わってほしい。
- ・全ての子どもたちが一人一人尊重され、その子らしく、成長でき、その成長を次につながるようにサポートしてほしい。
- ・園、学校側がもっと障害に対する理解を深め、定型発達の子どもたちと一緒に関わっていける場にしてほしい。
- ・みんなが手を取り合って子どもの権利と過ごしやすさを考え工夫していき、誰も孤独にならず、手を取り合って考えていきたい。
- ・ダメ出しや不定的な言葉ばかりに晒されず、ほめられて挑戦できる家庭以外の居場所ができるようにしてほしい。

偏見や誤解は、「知らない」ことから生じる。保護者が特別支援教育の意義を正しく「知る」機会を設ける。子どもは親や教師の言った通りにならないが、親や教師のする通りになる。子どもには、大人がよい手本にならなければならない。なってほしい子どもの姿を、大人が自ら示すことで、偏見や誤解をなくしていきたい。



とれたて直送便



「置かれた場所で咲きなさい」より 著者：渡辺 和子

子どもを評価するのに「しか」を使わず、「なら」を使う。「〇〇は、足し算しかできない」と言わないで、「〇〇は足し算ならできる」と言う。これは単なる言い回しの違いではなく、教師の心とまなざしの違いである。子どものできない点を強調するのではなく、できる点を強調する教師の心に宿る、子ども一人一人への愛情とそのほとぼしりが、言葉となって表れ、子どもを生かす。言葉はいつまでも生きものであってほしい。相手を生かし、自分も力づけられる、血の通った、ぬくもりのある言葉を、そして、その言葉が使える自分を、無機質なものの溢れる中で、しっかり守っていきたい。相手を生かす、ぬくもりのある言葉を使える自分でありたい。